

## 巻頭言

歴史分科会長 瀬谷高校 長島一浩

本年度より歴史分科会会長を務めることになりました。皆様方におかれましては、社会科部会歴史分科会の諸事業に平素よりご理解とご支援を賜り誠に有難うございます。お届けするこの本年度研究報告にあります通り、諸委員会の活動は活発に展開されておりますが、より一層の活性化のためにも、今後とも是非ご協力、およびご参加を宜しくお願い致します。

さて、新学習指導要領が公布され、「歴史総合」の実施もいよいよ迫る中、従来からのアクティブ・ラーニングは言わずもがな、授業改善への取り組みはさらに喫緊の課題です。

その中で、相変わらず気がかりなことがあります。多くの授業例を学ばせて頂いている中で—それらはとても意欲的で素晴らしいと思われる実践ばかりではあるのですが、これは歴史をつかった「教育学」をしているのか、それとも、教育方法を考えた「歴史学」をしているのか、いささか戸惑う状況が多々あることです。

最近、ある著名教育雑誌で見かけた日本史の授業実践例です。「鎌倉時代の将軍」を問う内容で、ジグソー法の授業展開自体は興味深く有効と思えるものですが、問題は授業内容自体です。伝える内容として、中世社会の身分秩序の中、将軍に就けない北条氏が執権として実権を握り、血筋をしたたかに乗り越えた北条氏の柔軟性を学ぶ、等々あり、その理解にいささか違和感を持ちました。まず、社会的身分秩序と幕府執権をつなげることには無理があり、また、時代により異なる「将軍」という存在への言及や肝心の鎌倉将軍自体の考察も無く、生徒に求める学びとしてこのような中世・鎌倉時代史の歴史認識で良いのか疑問に思いました。

歴史の教育である以上、歴史自体の学びを追求したい。そのためには、相応の歴史理解の深化が求められます。どんなに教育方法を工夫しても、歴史内容を踏まえその学びを追求することは不可能です。決して教育方法を軽視する訳ではありませんが、教育学の目的は歴史自体にはないからです。我々は専門研究者ではないのかもしれませんが、発展進化する研究成果や理解を適切に捉えていない認識では説得力に乏しく、そこに何らかの齟齬が生じるでしょう。

そして、この歴史の研究とは必ずしも従来からのものとは限りません。伝統的な、いわゆる専門家による実証研究だけが研究ではなく、むしろ昨今のグローバル的な状況、多岐にわたる複雑な歴史内容は従来からの研究手法では対応できないものを持っており、いわゆる「オーラルヒストリー」をはじめとする新たな対応が求められています。また、そこではだれもが「歴史家」として日常的に歴史実践に取り組む、「歴史のメンテナンス」と呼ばれる状況が存在します。歴史は、歴史学者だけのものではないということです（保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』御茶の水書房 2004 参照）。

さらに思うのは、そうした新たな歴史研究・実践に取り組まねばならない典型的な存在こそが、日常的に授業に励む私たち教員なのではないかということです。歴史教育法に意を傾けることは最早当然ですが、それだけでなく、より一層、私たちの歴史自体への主体的な取り組みの努力が求められているのではないのでしょうか。

教えることは学ぶこと、私たちの歴史への姿勢、一挙手一投足に生徒の眼差しが注がれ、そこに学びの質や方向性が規定される、そんな気がしてなりません。